

双子

奥田 かなえ

私の妹は双子である。

テレビなどでよく見かける双子は、ほとんど顔の形も同じ背丈も見た目もどちらとも区別がつかないほどよく似ている。でも、妹たちは二卵性双生児だからか、顔かたちも容姿も性格もまるで違う。

「あなた、兄弟は何人？」

人は初対面の時、親しくなるための方便として時に兄弟の数を聞いてくる。

「二人です」

私は今までいつもこのように答えてきた。

戸籍上ではそうなっているのですが、嘘ではないが、いつも心の中では何か引つかかるものを感じていたのは確かだ。

二人は、二月に生まれる予定だったのだが、予定日よりひと月早く生まれた。それも、一月一日、お正月の朝の事だった。

母が

「どうもおかしいのよ。水が出てきたわ。お父ちゃん、早くお産婆さん呼んできて」

こう言つて騒ぎ出し、また寝ていた私

と弟も起こされた。父はあたふたと自転

車でお産婆さん呼びに行つた。

「姉ちゃんは、早く桜井のおばさん呼んできて」

母が、ずがるような目で私に言った。

私は一瞬たじろいだ、ウンと頷くと、すぐに玄関へ行き下駄を履いた。

「ねえちゃん。待つてえ待つてえ」

弟が追いつがるのを手で払いながら、

「桜井のおばさん呼んで来るだけやけえ、うーん、もう。ちよとまっときいね」

「ぼくちゃんも行くぞ」

「お姉ちゃん、連れて行つて。そして早く桜井のおばさん呼んできて」

母の泣きそうな声に、

「はよ、おいで」

私は弟の手を引っ張つて、走つた。

「おばちゃん、おばちゃん、起きてよお玄関をどんどん叩くと、「誰ね」とい

いながら、玄関におじさんが顔を出してきた。

「お母ちゃんが、赤ちゃんが生まれそうだって。早く来てつて。お父ちゃんが、今、お産婆さん呼びに行つたから」

弟も一緒になつて

「おばちゃん、はよはよ」

という、おじさんがニヤニヤして、

奥に向かつて「おーい」と呼んだ。

「いくら何でもおばちゃんは寝間着姿では行けん。着替えてすぐに行くから、あんたらも家へ帰つて着替えとき」

おじさんの言葉で弟も私も寝間着の前がはだけたまま突っ立つていた。急に恥ずかしさを覚え、「ハイ」と返事をして弟の手を引いて引き返した。

「すぐ来てくれるつて」

母は少し安心したような顔をしたけれど、苦しそうな息をハアハアとしていた。「今ちよとだけ落ち着いたから、そこにあるお正月の着物を着んさい」

前日の夜に、明日はお正月だから、全部新品を着るのよと言われていた。母は喘ぎながらも、枕元に置いてあつた真新しいシャツと着物を、私と弟に着せてく

れた。

「オオイ、お産婆さんが来てくれたぞ」

父が自転車の後ろにお産婆さんに乗せて帰ってきた。

「おそなつて、ごめんごめん。どんなにか」

そう言つて手拭いで頭をくるんだ桜井のお婆さんもやつてきた。

「はよ、ご主人、お湯を沸かさんかいね」

桜井のお婆さんに大きな声で言われて、父が慌てて水を一杯にいられた鍋を抱えていた。

「こんな時に限つて、なかなか火がつかん」

父は一人でブツブツいいながら、おくどさんの穴口に向かつて、火を起こそうと竹の火吹き棒を必死に吹いていた。

「どれどれ、どんなにかね」

お産婆さんが母を横に寝かせて聞いていた。母はうんこらうんこら言つていたが、しばらくすると、また少し落ち着いた様子だった。

桜井のお婆さんが

「あんたら、二人はお正月らしいええ着物を着せてもろて。外に出てお日さんが上がるんを見といで」

私の背中を押して弟と二人外へ出てい

るようにと言った。

私は弟の手を引いて外へ出た。外は朝早いせいか、まだ誰もいなかった。

お正月にしては、雪も降らず暖かい朝だった。二人で並んで立っていると、真正面から太陽が上がつてくるのが見えた。

「ねえちゃん、寒いねえ」

「ほんと、ちよつと寒いねえ。でも、こ

うやつて手を握つてこすつたら、ちよつとはええやろ」

「うん、ねえちゃん、まぶしいねえ」

「ほんと、まぶしいねえ」

弟の顔が太陽で赤く染まつていた。弟が姉ちゃんの顔が真っ赤と言つて笑つた。太陽は、すぐに目の高さからぐんぐんスピードを上げて空の上へ昇つていった。次第に暖かくなつてきた。

「赤ちゃんが生まれたから、もう家に入つてもいいよ」

桜井のお婆さんが呼びに来てくれた時には、二人ともすつかり冷えて弟は少し震えていた。

「ほら、見てみ、赤ちゃん」

桜井のお婆さんに促されて、すつぱりとくるまれた赤ちゃんを覗き込んでい

と、お産婆さんが突然、

「こりゃあ、いけんわあね。もう一人おるがね。お父ちゃん、もう少しお湯を沸かして」

「何？ もしかして双子か？」

父が驚愕の声を上げた。

「双子の用意はしてないけど……」

母が小さい声で言つた。

「真綿があるかいね。お父ちゃん」

お産婆さんが聞くと「さあ……」父は竈の前に立つたままじつとしていた。

「うちにあるけえ、今取つてくるけん」

桜井のお婆さんが急いで出て行つた。

二人も入つてたから、お腹がこんなに大きくなつとつたんやねえ」

お産婆さんの手の中にもう一人の赤ちゃんが出てきた。

「前の子は、色の白い小さな赤ちゃんやけど、今度のは少し大きくて色もちよつと黒いけど、泣き声は天下一品、元氣な子やねえ」

お産婆さんの言葉に、私と弟は二人目の赤ちゃんをみた。お産婆さんの手の中で真っ赤になつて泣いていた。

桜井のお婆さんがハアハア言いながら

真綿をもつて帰ってきた。お産婆さんが赤ちゃんを、上手にその中に包みこんで寝かせた。

「双子を産むのは昔から畜生腹というからね。これからどうするかねえ」

桜井のおばさんの言葉に、父と母がギョツとした顔をした。

「そんなことを言うては、いけんのよ」

お産婆さんが桜井のおばさんに注意すると、おばさんは肩をすくめてそっぽを向いた。その時、私は小学校一年生。七歳になったばかりで、弟は四歳だった。

だからこの言葉の意味を理解することもなかった。それが後々母を苦しめることになろうとは思わず、ただただ、二人並んだ赤ちゃんが可愛かった。

その日からは、毎日毎日、赤ちゃんの顔を眺めているのが楽しくてしようがなかった。母は二人の赤ちゃんを同時に抱えて、右と左のお乳を与えていた。そこへ弟も参入して三つ巴になって、母に叱られるのが常だった。

その後、すぐに新しい官舎ができたこのことで、引越すことになった。

「桜井のおばさんにはお世話になったけ

れど、もういい加減にしなくちゃ」

母はそう言うのと少し晴れやかな顔になって引越し準備をした。

新しい官舎に移ったのはまだ寒さの残る春先だった。私は小学校が近くなつて嬉しかった。双子は元氣よくハイハイを始めていた。母は、毎日、私と弟に双子を注意して見守っているようにと言いつけていた。

弟は赤ちゃんを追いかけて一緒にハイハイするのが楽しそうだった。が、それは時に赤ちゃんを脅すことになつて二人揃つて大泣きし始めるのだった。そうすると私はただオロオロしてしまう。：ちゃんが追いかけるから、と言つても、母の怒りの矛先は必ず私に向かつてくるのがよく分かつていたからだ。

「お姉ちゃん。よく見といてよと、言つてるのに」

そう言つて母が怒つた顔で台所から顔を出すのだった。

そんなある日、二人ともハイハイから急に立ち上がりができるようになっていた。色の白い方の赤ちゃんは、少し小さくて動きもゆっくりだったが、少し大き

くて色黒の赤ちゃんは、体も一層大きくなつてハイハイもしっかりしていてスピードがあり伝い歩きもできるようになつていた。夕方、母が野菜をトントン刻み始めていた。火鉢には、薬缶がのせてあり、シュンシュンと湯気が出ていた。その火鉢の縁をもつて色の黒い赤ちゃんが立ち上がった途端、

「ぎやあ……ギヤア」

物凄いい声の泣き声があつた。

私は一瞬何が起きたのか分からなかった。母が飛んできて赤ちゃんを抱いた。掌が真っ赤になつていた。薬缶のへりを触つたようだった。母はすぐに水で洗い、赤ちゃんを抱きすくめて、近くの病院へ走り出して行つた。私と弟はただ、ポカンとしていた。色の白い赤ちゃんが、ゆっくりハイハイしてきた。私の体を持つて立ち上がろうとした。私は赤ちゃんを黙つて抱いて泣いた。

しばらくして、父が仕事から帰つてきた。私の説明が何か良く分らないらしくも、すぐに父も慌てて出て行つた。二人で帰つてきた時には、赤ちゃんはもう泣き止んでいたが、父も母もぐつたりし

ていた。赤ちゃんの手は包帯でぐるぐる巻きにされていた。

その晩はその後何をどうしたのか、全く思い出せない。ただただ、あの赤ちゃんの何とも言えない悲鳴のようなふり絞るような泣き声が、それ以後ずっと耳について離れなかった。長い間私は母に怒られるよりもその声の方が恐怖だった。毎日まいにち、母は赤ちゃんを抱いて病院へ行った。

そんなある晩、父と母がぼそぼそと言いつつ、誰かの手伝いがないのに、双子を育てるのは無理だ。今回はやけどだったが、次は何が起きるか分からん。兄に相談したら、子どもがいなくて欲しいと言ってる人がいるから、養子に出してはどうかと言ってきた。どうするか、お前と相談して決めると返事をしたが、どうするか

父の声だった。私は仰天した。赤ちゃんのどちらかを手放すということらしいと察した。

「そんなことを言われても……」
母はそれつきり口を噤んだままだった。

私は飛び起きて、「これからは、ちゃんと赤ちゃん二人とも面倒を見るから赤ちゃんはどこへもやらないで」

そう叫ぶと、父と母の間に割り込んでいた。父も母も二人ともに黙り込んだままだった。

「分かったから、もう寝なさい」

父に促されるままに、布団に入った。赤ちゃんのどちらかを取られるのは嫌だった。次の朝から、母はニコリともしなくなつた。

私は毎日学校から帰ると、やけどをした赤ちゃんともう一人の赤ちゃんを、片時も離れず見張った。やけども少しづつ癒えたのか、色の黒い赤ちゃんは次第に元通り元気にハイハイするようになった。母は毎日引きつけたようになっていく皮膚をそつと撫でていた。

そして、母が高熱を出して倒れた。

夜中の授乳に続き、やけどの治療通い、食事作りの他に、家電も普及していなかった時代。二人分のおしめと共に、泥んこになった弟のズボン等、盥でのゴシゴシ手洗い。全てを自分で賄わなければならなかったことを考えると、母が倒れたの

は起こるべくして起きたことだったのだと、今になっては、よく分かる。

ある日、伯父さん、つまり父の兄が突然やって来て、両親を目の前に座らせて告げた。

「もう無理をするな。これ以上無理をして親が死んだら、この子らまで路頭に迷うことになる。先方は子供が産めず、養子に是非とも欲しいと言っているのだから」
泣いている母に向かって強く説得していた。

父は黙って俯いていた。

私は大人のやり取りを側で聞いていて、自分が子供で何もしてあげることができないのが悔しかった。でも、母が倒れて困つたのは、父であり長女の私だった。双子のどちらか一人がいなくなるのも仕方ないかもしれないと、何となくその時、伯父さんのピンと跳ねた髭を見ながら思ったのだ。

次の日曜日、養親になる女の人がお婆さんと一緒にやってきた。二人とも黒の紋付をきちんと着ていた。

両方の長い挨拶が終わると、「どちらの赤ちゃんを連れて帰ってもい

いですか」

と、お婆さんの方が言った。

母は黙りこくつたままだった。

「じゃあ、ハイハイで私たちの方に早く来た子を頂きましょう」

もう一人の若い女の人が言った。母の膝に抱かれていた二人を母が畳の上に置いた。

「はい、はい、いらっしやい。いらっしやい」

対面に少し離れて座っていたお婆さんと若い女の人が声をかけると、双子の赤ちゃんと声のする女の人の所へ行き始めた。

ところがどうしたことか、途中で色の白い体の少し小さい赤ちゃんが、くるりと向きを変えて母の膝に帰ってしまった。

色の黒い少し体の大きい赤ちゃんは、やけどもすつかり治っていたせいか、ものすいスピードでハイハイすると、さつと若い女の人の膝に乗ってしまった。

側で見えていた私はがっかりした。二人とも、途中でひっくり返って母の膝に戻ると思っていたからだ。

「あらあ、よく来たわね。じゃあ、お婆

さんと一緒にかえりましょうね」

そういうと若い女の人は、赤ちゃんを抱いて立ち上がった。

「それでは、奥さん、荷物を」

お婆さんがそう言って促したので、母は風呂敷に包んでおいた、おしめや着替えを差し出していった。

「お婆ちゃん、赤ちゃん連れて行かないで」

私は必死になってお願いをしたが、ずつとそばに座って成り行きを見ていた伯父が、私をジロリとひと睨みすると、それじゃあ、と言って立ち上がった。

父がよろしくお願いいたします。と頭を下げると、赤ちゃんを連れた三人は玄関を出て行ってしまった。

「あの子は、大きな財産のある家に後継ぎとしてもらわれていったのだ。あの家はもう三代にわたって取り子取り嫁で続けてきたのだが、どうしても子供がでずに困っているそうだ。それで今度は女の子をもらえば、きつと後継ぎができて家も安泰になるだろうということだった。それに系図を当たると、我家とは遠縁になるそうだから……」

父はため息交じりに私に向かって、山

がいくつ、田んぼが何枚、他にも色々代々の沢山の財産があるのだと言った。でも私は、そんな事より母の顔が見ていられなかった。

三人を送り出した後、母は泣き続けていた。

「女学校の頃は、水泳の選手で病氣一つしたことがなかったのに、肝心な時になってこんな弱くなるなんて。子供も守つてやれないなんて。畜生腹とまで言われて」泣きながら母は呟いていた。

その夜から毎晩、私と弟が寝静まると父と言い争う声が出て母は泣き続けていた。「お母ちゃん、もう泣かないで」

夜中に目を覚まして、その都度母を慰めたが、父はいつも一言も言わず蒲団を被って寝ていた。

やがて残された白い小さい方の赤ちゃんが、お正月を迎えて一歳になった。その頃には、もう母も泣くこともなくなっていた。

そして年が明けてすぐに母は入院した。何のための入院だったのかずっと知らなかったのだが、畜生腹でまた赤ちゃんができる困るので、もうできないように

してもらったのだと、私が出産で里帰りした時に、母は語った。その時初めて知った事実だった。

そこから思い至ったのが、何故、あんなに母が病気がちだったのかが分かった。母はその手術のために、人よりも早い更年期症状が現れ、苦しみ、病気がちだったのだと、ようやく思い至ったのだ。

もらわれていった赤ちゃんとは、それからずっと顔をあわせることができなかった。高校卒業時に、彼女は一人で家に挨拶に来たが、長年の出会いがないために、兄弟三人とはぎくしゃくした物言いしかできなかった。

色の白い赤ちゃんは、私のことをいつでも姉ちゃんと呼ぶ、が、色の黒い赤ちゃんは、今でも私のことを友達のように名前前で呼ぶ。仕方ないことだと心では理解するものの、なんだか心寂しい気がする。

双方の両親も歳をとり、大きくなった赤ちゃんたちも、自分の力で行動するようになって、ようやく兄弟が頻繁に会えるようになった。それでも、ずっと一緒に育ってきた色の白い赤ちゃんは、育つ過程を私が見聞きしているの、軽口も

叩き合えるが、離れた赤ちゃんには、赤ちゃんの時の感情から一歩も前に進めなかった。

少し色の黒かった赤ちゃんは、背が高くてきれいな娘になり、とても元気で子供を三人産んだ。望まれた通りきちんと後継ぎも作った。大きな名家の跡取りとして、先祖伝来の土地や山を立派に守り続けた。あの活発な行動力のある赤ちゃんは、将来の縮図をハイハイのあの時に、すでに自覚し持ち合わせていたのかもしれないと、今は時々思うことがある。

その双子も、今年、古希になった。養親も亡くなり、ようやくこれから自分の時間という時になって、難病に侵されていることが分かった。会いに行つてなんとか励ましてやりたいと思うのだが、このコロナ禍の最中では、どうすることもできない。

あの時と同じ気持ちだ。自分の力ではどうすることもできないことに、今また打ちひしがれている。一方、色の白い赤ちゃんは、今では素早く動く口の立つおばさんになった。

時々、私は人の運命の分かれ目を思う。

もしよだとか、よだつたら、など、考えても仕方のないことと分かっている。生後八か月の別れはやはり可哀想だったとしか言いようがない。

そして、母を思う。

近年、家電製品の進歩、多胎児への支援、男性による育児休暇の取得や差別発言への注意喚起など。今であれば、あれほど泣いて泣いて泣き暮らさずに済んだのにと……。

加えて今、人同士お互いを支え認め合おうという風潮が出てきたことは、とても嬉しく思う。これらのことが、将来にわたって一層根付き、一人でも涙を流す人が減ることを祈つてやまない。